

# COSMOS集



「あすなる集」特選

## 夕立の声

伊藤 祐楓\*茨城

化粧より難しきもの今日明日の患者に作りし笑顔また声  
コロナ禍がヒトに与える厭らしさここは戦後の闇市じゃない  
ハンガーに干されしわれの着物の背肩幅せまく触れても狭く  
われがまた机に伏していたことをきみしか知らぬ夕立の声  
雨音に目覚めてみれば闇深くそのままソファで朝を待つ夜

## 油頭ハンカチ

工藤 亜希子\*東京

時を経た油頭ハンカチ思わせる老婦人いて声うつくしき  
ひしひしと床軋む音のつそりと意思うすき父の影うごく家  
Amazonの定期便にて紙襪襪送る手はずの調う夕べ  
ちちははが老いてそののち吾が老いる廊下で順番待つような夜  
瓶底に掬い残したジャムがあるそんな心地に旅を終えたり

## 風曜日

印出 美由紀 神奈川

いくたびも疫病くぐりし観音のガラスの内の面差し玄か

トトトトトお散歩カーでゆく子らを救ふるやうに小啄木鳥がつつく  
螢鳥賊の発光するを見たことなし臓がほんのり味蕾を点す  
木曜のつぎは風曜日がいいな聖霊降臨祭にも歌へなくつて  
てらてらと息苦しさう教会の木の壁が塗りかへられて 夏

## パンくず

有上里 恵\*福岡

早起きは一番カラス次スズメ七月に入り新入りのセミ  
パンくずを運ぶ蟻たち100匹が15分かけ2メートル進む  
黙々とパンくず運ぶ100匹の蟻に一羽の雀が無言で近づく  
嫌なことすぐに忘れる友がいて秘訣を聞くと「忘れることだよ」  
はじめてのパン屋さんでは食パンとメロンパン買いいいし試す

## 颯爽と

河内 妙子\*広島

アンデスのジャガ芋の花半色梅雨空のした鮮やかに見ゆ  
プランタに育つ胡瓜の三本目が明日の朝には地面に届く  
死ぬ気せず九十六の父自転車で今朝も汲みに行く延命水を  
坊主にし作務衣に草履軽トラで颯爽とした婆になりたし  
繋がるということに嫌気さしてからだだ通話のみの携帯にする

## みけつくに

内藤 丈子 福井

ゆらゆらと若狭の海を見放くれば背に生え初むる海鳥の羽  
御食国の鯖のへしこはおいしくて若狭の浜に海鳥つどふ  
二条院讃岐もかつてながめたる若狭の浜で焼き鯖を食む  
にんじんの白き花咲くあかつきは梅雨のしづくに濡れる風たち  
半夏生はたけに咲きて白粉は老い母のごと斑にこぼる

ラ ジ オ 屋 石 田 信 夫 \* 鳥 取

その昔ラジオを売りしラジオ屋の屋号はラジオ屋やめてもラジオ屋  
山合の町より消えてはるかなる駄菓子屋、下駄屋、綿屋、豆腐屋  
巷間の噂、趣味など男らの癒しの場となる町の散髪屋

天気図の日本列島に突き刺さる雨量四角柱鉄杭のごと  
「経験をしたことのない」雨ばかり経験すれど字びの遅し

猫はかすがい 栗 山 貴 臣 \* 福 岡

椅子とりのゲームをせずとも一人ずつ座れるはずの世界あるはず  
人よりも犬の名前で区別する花ちゃん連れておじさん来た  
目の前の三匹の猫置いたまま先には逝けぬと妻の一言  
傘寿まで生きる必要出てきたと猫の寿命を自分に足して  
猫がいる暮らしの良さはただ一つどんな時でも猫はかすがい

く つ ぬ ぎ 石 樋 田 由 美 \* 三 重

気になって仕方ないのは靴ひもが片方とけたまま歩く君  
じつとりと汗ばむ肌に吸い着いたこのシャツよりも地獄のマスク  
あったよね 昔の家は縁側もくつぬぎ石も確かにあった  
三色のスリーアギトス 青い空、赤いトマトと緑のサラダ  
草食獣肉食獣が舌を出し熱さにあえぎコロナ禍を生く

時 代 の 森 水 辺 あ お 静 岡

さはやかな朝陽があたりやすらかな夕陽がとどくつがひの鴨に  
〈さへづり〉にならず若きらへ地鳴きせり恋のしがたき時代の森で  
〈副反応〉どうもなじまぬ語の響き嘘ではないが詐欺のほひす

俺たちが育てちまつた(大怪獣)ゲリラ豪雨にまたも襲はる  
志高きにありて峡深し世の岨道を行く杜甫の影

チエリーセージ 青 木 淳 子 鳥 取

咲き初むる白あぢさゐのの前に佇つ母の気配にはさみを仕舞ふ  
夕食のしたくに飛魚トビウオの十匹をさばれば四方に飛び散るうるこ  
ホバリング止めて蜜吸ふくま蜂はチエリーセージの枝しならせて  
乗る人のなき自転車に蔦からむ友は施設に入りて三年  
肉厚でちよつと小ぶりの(ピー太郎)ピーマンなれどほんのり甘し

サ ッ チ モ 鶴 田 竹 一 長 崎

植木鉢くるり回せばクンシランひと月遅れの花が葉陰に  
山里の地蔵までもがマスクする日々が笑へる日よ早く来い  
サッチモの流れし二時の深夜便体揺らして眠りに落ちる  
五つ指の靴下を脱ぎ三度目のシャワーを浴びてビール飲み干す  
忘れ事の批判しないと妻と決め七十年代の坂を上りぬ

跳 ね る 鰯 中 居 久 子 \* 岩 手

打ち上る数多の鰯に日の差して磯は銀色群れ飛ぶ鷗  
逃がすまい跳ねる鰯を手掴み濡れた両手の鱗がひかる  
捕りたての小さき鰯を釜茹です天日に干した煮干ぞ旨し  
晩涼の岸辺に波のやや荒く鷗の一羽沖へ飛び立つ  
子の病、夫の死さえ運命と思えるまでに時は過ぎたり

六 百 円 な り 高 瀬 和 子 兵 庫

堰あけられせせらぎの音もどり来ぬ田植の前のしあはせの音

やつとこゝろ接種を受ける日が来たり日めくり暦のあかき花まる  
イチローを真似て(ユンケル)グイと飲む今日の元氣は六百円なり  
古き皮捨ててゆくへビ、我もこのかたき皮脱ぎきれいになりたし  
ドライアイを患ふ身なれど亡き夫を思ひ出すとき眼はなみだ出す

移動販売車 池内祥子\*愛媛

庭先に移動販売車やってきて近所の老がぼつぼつと来る  
コロナ禍で客を求めて販売車明るい曲でこの村に来る  
庭に来る販売カーの品々に行商ありし遠い日思う  
村に来る販売車には小型レジカード支払い大丈夫です  
石鏡山のお山開きは雨の中神は背負われ頂上に行く

目玉が動く 河本洋子\*奈良

早苗田から青田となりて初夏の風吹き渡るいちめんのみどり  
いちめんのみどりに萌えて青田の上下へ左へ赤とんぼ舞う  
透明のメダカの卵藻の先に生まれて七日目玉が動く  
卵からメダカ飛び出し水槽に尾を小刻みに振って泳ぎぬ  
関ヶ原古戦場近き醒ヶ井の清流に浮く梅花藻の白

神楽坂の犬 前中映東京

乗り換へのたびに歩いて渡る橋けふは桜花を浴びつつわたる  
ダ・ヴィンチの素描のやうなひとだつた春の湯船に髪をたばねて  
「こんにちはヤクルトです」といふ声に犬が応へてゐる神楽坂  
グーグルの暦ひらけばあかあかと死んだひとにもある誕生日  
ハムエッグ丼のうまさを知らずして人生を語るなつて感じ  
「宣言」が「寝言」に見えてまあいいか 令和三年四月も終はる

モネの庭 北村さちこ\*高知

昨年の霜月以来のおでかけに半年振りにうす化粧する  
久々の老人会のバスの旅青い睡蓮めざしてモネの庭へ  
三時間バスに乗り来てモネの庭今日は逢えるか青い睡蓮に  
青い睡蓮みたよ見ました遠くより来たかいつた友と喜ぶ  
ドカーン、バリバリ頭上でとどろく雷に部屋のコードを抜いてまわりぬ

郭公ふたつ 牧好恵東京

郭公の二つゐて鳴く森の中こだまのごとし明るきこゑは  
打つた打つたワクチンやつと打つて来た少しだけ初夏の夕ぐれ  
Gパンのポケットにいつもあつたつけ「故郷」を吹く義兄のハモニカ  
机から落ちた消しゴムうばひ合ひ猫のサツカーはじまるはじまる  
苦学して工事現場でバイトした絵の先生のきれいな〇脚

母の手作り 相森野志恵佐賀

四番の歌詞に「お」の字が四つ付く「あの子はだあれ」優しく唄ふ  
ランドセル、ピースの帽子、洋服も母の手作りなりし憶ひ出  
着物解き「簡単服」を手縫ひせし節約せめの在りし母はも  
高価ゆゑ緋は買へず仕事着も綿の上下で母は通しき  
朝なसानな祖父が煎じて飲みてゐし「現の証拠」は抜かずにおかむ

感染者四桁 風岡俊子静岡

老人も虫も多き村に住み田圃に葉をまけぬ村人  
感染者四桁のニュースを聞きながら音立てて跳べる空豆を剥く  
コロナ禍に大海広がる田子の浦ひとり浜辺で潮騒をきく

ワクチンを二回打つたぞ母さんは子らといつしよの夏の旅待つ  
どうだつていいことだけどわが思考次第に子らになびく貧しさ

ホトトギス鳴く 角田敏郎\*神奈川

老二人何とか傘寿と喜寿を越ゆかばい合いつつ老後を生きる  
妻と我二度の接種を無事に終えコロナ禍の脅威少し薄らぐ

ホトトギスくぐもる声で鳴き継げり梅雨の晴間の団地の夕べ  
老いゆくは淋しきものぞ巢こもれる夜のしじまにホトトギス鳴く  
どん底から再起果たしし照ノ富士今はできることやるだけと

本棚の本 森下たみ\*埼玉

たまさかにキッチンに立つ老い夫の作るはカレーいつものカレー



「その二集」特選

入道雲 清水佑太郎\*東京

古椅子に飼い犬のせて空を見る入道雲は内から増える

熊蟬がみんなで何度も「シネシネ」と鳴く林抜け夏に飛びこむ

冷房は二十一度のフルパワー毛まみれ犬の欠伸と背伸び

日に焼けた日の夜は目が冴えていて今日が明日に変わる音聞く

棒天を冷やしうどんに浸しつづ禁煙二月月過ぎて大空

日曜日マドレーヌ焼く匂いみち子ら起きてきたあのころのこと  
野菜室すねてるような野菜たちスープにすればいい味だして  
ギボウシの葉にすがりいるカマキリの影のようなるその薄みどり  
駅前の本屋はしまり図書館は遠し本棚の本読み返す

青大将 斎藤嶺也 北海道

「ホーホケキョ」法華経法華経こゑだかに留守寺守る森のうぐひす  
尻ふれど常に平らに均しくる「モンロー」と言ふ代掻き装置  
青き空揚がるや揚がる揚げ雲雀雲に吸はれて消えてしまひぬ  
野の花は野に有りてよし池の辺の草叢に咲くあやめ一株  
陽の当る玄関先に青大将ぬるりぬるり通り過ぐるよ  
池の端に鴨の番の憩ひをり二つの波紋重なりて消ゆ

水底の影 尾花照子\*福岡

水底を<sup>みぞ</sup>あめんぼの影跳ねているアームストロング船長のよに

プランクトン喰わんとマンタひるがえりカリブの海の大穹を抱く

高松塚古墳の前をてちと白いフレンチブルドッグいく

神宮の低き柵に頭を擦りて若き男鹿の奥山へ消ゆ

若葉風徳山駅の窓の外に沖へと向かうタンカーの見ゆ

ジャムを煮て 三村幸子 兵庫

向日葵を我が弔ひの花とせよ 痺れるまでに骨を燃やして  
ジャムを煮て泣きたい気持ち堪へをり降りだしさうでふらぬ曇天  
どこまでもつたなき恋の反語法 トマト畑でまた会ひませう  
全力で卵白を泡立ててゐる幸福な日の演出として

花束にすればしきりに発語する色とりどりのガーベラ達は

雨の七夕 高橋 梨穂子\*新潟

アップライトピアノに向かいその指がうみだす小鳥の初恋のうた  
数々の実らなかつた初恋がどこかでひかる雨の七夕

いくつかの無事に実つた初恋が雨宿りするような七夕

水は水 両手のひらを碗にしてすくう金魚の真つ赤ないのち  
適当にくくつた髪の毛に夏の気配があおるかすめる  
リュックから大きなセロリはみ出させ今日という日も主役はわたし

平熱 宮 太一郎\*東京

銃口を額に向けられトリガーを引きその刹那「平熱ですな」  
いつもより気だるい目覚めその理由はオオタニサンの快音不在  
コーヒを凶暴に挽くブレードの回転音は第二の目覚し

8時57分発の快速に間に合うためのドリッパバック

青天を高く羽ばたく燕の描く軌道は見事なアーチ

空に雲耳にイヤフォン口マスク真白き綿のような牢獄

命の重み 増田 柳子\*福岡

一日の暑さきつさを焼き尽くす茜の空の背後には青

夕まぐれ開けた窓から蝙蝠が飛び込んできた思い出消えず  
複雑で経路の読めぬ飛び方で蝙蝠は言うチカツカナイデ

赤ちゃんのお披露目に来た同僚に抱かせてもらう命の重みを  
リスキーで未来も語れぬこの夏に「生まれました」の「アハ」相次ぐ

粗大ゴミ 人見 江一\*神奈川

点検のエスカレーターに黒々とふだんは見えぬ奈落がのぞく  
長年を共に過ごした家具なのに粗大ゴミとは悲しい呼び名  
スーパーで買った品物置き忘れ中身細かに電話で伝う

ワクチンを打ち終え待機十五分雨降らせてはすぐに去る雲  
ワクチンの副反応はあまりなく少し悔しい梅雨明けまぢか

イタチの陳述 川越 三紀子\*宮崎

少年がバスケットゴール揺らす音冷や汁のネギ刻みつつ聞く  
苛立ちや恐れや怒りを少年は今日もまたひとつゴールに投げる  
突然に向かいの屋根に現れたカラスの群れから目が離せない  
そのむかしふたり子競いし我が膝に犬のリン乗り寝息をたてる  
「すくそこですつと我等は生きている」目を合わせイタチ陳述をする

バックヤード 福本 郁子\*京都

淡墨の滲むが如き夏至の宵くちなしは濃く匂い放ちて  
今ならばワクチン話題に立ち話ゆるくさくさく日は過ぎゆけり  
お値段を見て出した手を引つ込める半月切りのスイカは笑う  
思いきり泣くみどりこの声響くわが逡巡は色あせること  
懸崖の菊を仕立てる七月のバックヤードに秋育ちおり

今日を占ふ

植田 カズミ 鹿児島

朝なさなメジロ囀るさくら木のソプラノ、アルト、春蘭けにけり  
お手玉のやうなる頭三つ並べ仔山羊は乳を交互に飲めり  
菜畑に辣非作る弥生ちやんラッキョウパウで夏を乗り切る  
おとなりの堅物ジイさんよろづ屋で物作り、修理なんでも出来る  
老い父のトーストかじる音聞きて今日を占ふ朝光の中

命の力 渡辺 繁\*千葉

江戸川の淀に群れいる若鮎の堰飛び越ゆる命の力よ  
缶詰のいわしに冷酒ひとり酌む家飲みはよし安くて旨し  
マスクして検温うけて手を消毒 儀礼のすみで店に入るなり  
夏祭りは今年も中止マネキンの浴衣姿をさびしく見つむ  
本日の歩数をノートに書き記す遠出したるは一年も前

あたらしき鬱 池田 あつ子 愛知

窓の外の緑重たき鬱金桜は代替はりしてあたらしき鬱  
食卓に薔薇が欲しくて求めたる十本の薔薇よここが咲く場所



九十七歳の母に祝がるる誕生日けふからわれは後期高齢者  
夜半さめて口遊む歌ケセラセラなるやうになる 再び眠る  
長泣きをしてるやうな梅雨空の書割はがせば其処は草原

紅ばら 稲吉 裕子\*愛知

海洋に「処理水」放出と言ひ換えて「汚染水」流す時の政權  
弾圧はつね言論に始まりて「りんご日報」廢刊となる

ていねいに生きたしと思ふ布に刺す糸とりどりが主張している  
埃くさき書棚の奥より取り出ししニーチエ一冊ずしりと重し  
くれないを吐き続けている紅ばらの空仰ぐありこちら向くあり

有為の奥山 佐野 仁\*香川

永らえば因縁しがらみ絡み付き「有為の奥山」越える術なし  
午後は雨の予報に急ぎ咲き誇る芍薬に蛇の目さし掛けやりぬ  
雨を呼ぶ風のしずかに吹いてきて四葩の重き花房ゆれる  
雪けむり上げつつ山陰転げ落つ雄鹿の後にとどろく銃声  
矢の如く紅葉の沢を翔び下る山鳥に見惚れ引金ひけず

それぞれに老ゆ 富永 弘 東京

流れゆく真白き雲を田の畔に母と仰ぎぬ終戦の日に  
暑き日の続けば父が牛の口むりやり開き味噌押し込み  
晴れし日をみんなで団地の草を取る築三十年それぞれに老ゆ  
草取りの出欠とれど欠席の者は責めずと前任者より  
母に似て腰の曲がりし媪いま横断歩道を渡り終へたり